



『レ・ミゼラブル』の広告ポスター(1886年)
The Bridgeman Art Library / アフロ(p.72下欄)

この7月、パリ郊外・ビエール市にある「ヴィクトル・ユゴー文学記念館」を訪れた。美しい芝生と緑の林に囲まれた館には、ユゴーの若き日、亡命の日々、政治的活動などの資料や直筆原稿などが展示されていた。

本年はヴィクトル・ユゴーの代表作『レ・ミゼラブル』発刊からちょうど150年にあたる。12月からは日本国内でも映画が上映され、明年には1985年ロンドン初演以来、世界43か国、21か国語で上演され、驚異的ロングランで6000万人を動員した舞台も上演される。『レ・ミゼラブル』(邦題「ああ無情」)のストーリーのすべては知らなくても、物語の最初に出てくる「銀の燭台」の話聞いたことのある人は少なくないだろう。

ひと切れのパンを盗んだがゆえに、19年間の投獄生活を送ってきた主人公のジャン・ヴァルジャンが、ミリエル司教から食事や宿を提供され、初めて人間らしい扱いを受ける。ヴァルジャンは銀の燭台を盗み逃げ出してしまうのだが、警察に捕まったときに「銀の燭台は彼にさしあげたものだ」とのミリエル司教の慈悲の深さに心打たれ、生まれ変わることを誓う。その後も物語は続き、ヴァルジャンは徳行を積み、地方都市の市長になるが、無実の罪の男を救うために再び獄に繋がれたりと、波瀾万丈のストーリーが続く。

名作は、もつとも苦境のときに生まれた『ノートルダム・ド・パリ』などの作品の成功で、ユゴーはパリの文壇で押しも

されもせぬ作家となるが、1851年に起こったクーデターでは亡命を余儀なくされた。動乱の続いた19世紀フランスで、ユゴーはつねに虐げられている民衆の側に立ち、戦うこと、書くことをやめなかった。そうしてイギリス海峡の絶海の孤島に居を構え、不遇の19年間のなかで書き上げたのが『レ・ミゼラブル』であった。題意は「惨めな人びと」。言論の闘士として、民衆を見下す権力とは徹底して戦うユゴーの姿が物語からもひしひしと感ぜられる。そして、この不朽の名作は150年経ったいまなお、世界中で勇気と希望を与えている。

『レ・ミゼラブル』の発売当日は長蛇の列ができ、本は飛ぶように売れた。ユゴーは当初、作品の売れ行きを心配し、出版社に「？」とだけ記した問い合わせの手紙を出した。出版社からは「！」とだけ記された返事を受け取ったという。それぞれ「売れている?」「売れて、売れて!」を意味したとされるこれらの2通は、世界一短い手紙と言われている。1885年に83歳の生涯を閉じたが、人びとは、凱旋門からパテオンまで行進し、国葬をとりおこなった。

「海洋よりも壮大なる光景、それは天空である。天空よりも壮大なる光景、それは実に人間の魂の内奥である」。——青年を愛し、民衆のために立ち上がったユゴーは、人間の魂に最大で無限の光景を見た。彼の作品に生きる信念こそが、人間の魂の内奥を揺さぶるヒューマニズムに貫かれている、と言えるだろう。

写真文 清水武

ユゴーの国葬には、200万人もの市民が凱旋門に参列し、別れを惜しんだという



ていねいに整備されたユゴー文学記念館のフランス庭園

